

六

花



8

2023

りっかはいくかい

水中の海老は透明西日中  
肱川はときに狂ひぬあばれ梅雨  
おにやんま人の投げたる小石追ふ  
短夜やサウナのドアの開かぬ夢  
朝蟬や透けて詩を生むガラスペン  
五月雨のまん丸真珠浮御堂  
蠅虎向きをくるりと朝の窓  
七夕や祖母はさうめんゆでてをり  
梅雨さなか唐三彩の馬いぢり  
鬼やんま仁淀の夢に覚めし色  
夏料理色鍋島の皿鉢盛

手脚なき鮎激流を上りきり  
一身を賭したる鮎の打ち上る  
三彩馬なでてをりたる梅雨籠  
亀の手が磯の夏潮切り砕く  
蚊の肥ゆるもとは吾かも耳を打つ  
冷え性ぞ夏布団より足が出て  
妻の杖吾に短し梅雨晴間  
五月雨に濡れて赤んぼまばたきぬ  
脚振つて喜んでゐる人の孫  
水飴ならず松脂の噴く西日かな  
腕時計はづせば日焼けしてをらず  
蜘蛛嫌ふ蜘蛛の刺青する女  
鮎食べに淡海の国へ走りけり

吟行へ家内の日焼け止めを借り  
犬の舌こんなに伸びて西日中  
猛者えびの浦富浜に来てをりぬ  
ふはふはを幾度も重ねかき氷  
六甲の氷室より出しかき氷  
蚊を打つて塩温泉に沈みけり  
かはほりに偽むらさきの帳かな  
梅雨晴や天使の梯子降りて来し  
吊忍姉小路の京町家  
膝下を水の風ゆく夏料理  
山法師八尾やっおの夕に実の甘し  
紅くなき神社の鳥居海の風  
石一つ灼けて富山の城址かな

すずめ蜂せみの頭を齧りけり  
右の手を上げて夜店の招き猫  
遠山は波頭のごとく夏はじめ  
大渦の引き込む力盆の舟  
扇面に書き散らしたる糸瓜の匂  
水吹いて風送りたる渋団扇  
お菊虫姫路のゆかた祭かな  
かき氷右手を上げし招き猫  
手弱女の麝香あげはを手にはさむ  
葦簀から部屋の話のまる聞こえ  
鶴下絵三十六歌仙夏座敷  
人麻呂の書き損じたる夏屏風  
万緑のおにぎり山を脇目にす

## ふんわりと装ふ豆飯母老いず 磯野青之里

ふんわりとよそうまめめしはおいず  
 豆飯の一番おいしいよそい方をベテランの母は豆とご飯のハーモニーを心得ていて昔ながらの装いかたをしていることに感銘した。そこに母は昔の若い母のままだ。それで母は「老いず」と安堵したのである。母の若いころのままの豆飯の装い方がうれしいのである。ほかに「よそる」などいろいろ表現があるが、よそふで採った。  
 (六甲)

## ヒマラヤのひなげしは青雲の峯 延川五十昭

サンスクリット語で、hima (ヒマ「雪」) + agraya (アーラヤ「すみか」) から「雪の住みか」というらしい。いかにもである。その雪が空の青を取り込んで咲かせた青い花(ヒナゲシ)は神秘的。ポピーの花言葉は、「憩い」「恋の予感」でそのほか怖い意味もあるから注意。「雲の峯いくつづくれて」と芭蕉も詠んだおくの細道をたどってこの句が生まれたと思う。ふと思うのは花は虫の媒介によって交配するから、虫を呼ぶ色が多いが、神の域に近い雪山ではヒマの神の意思によって交配されるので青いのではないかと思わせる。(六甲)

## 春惜しむ ◎ 笹村 政子

濠前のホテルに春を惜しみけり  
 白鷺の濠の水へと影灯す  
 白鷺の暮れ残りたる時かな  
 葉桜の透けたる空のありにけり  
 逝きし娘の譜面のくせ字花は葉に  
 雑穀を二分混ぜてみる葉の日  
 新茶汲むきゆつと鳴りたる茶筒より  
 高階の乾きやすさも薄暑かな  
 指先に火照りの残り袋角  
 袋角風が冷ましてゆきにけり

## 新茶 ◎ 志方 章子

封を解く手前に匂ふ新茶かな  
 若楓手にひいやりと触れにけり  
 子供らの尻を濡らして浅蜷掘る  
 舌先のほんのり甘き白つつじ  
 玉子綴ち庭の豌豆摘みて  
 効能を並べたてたり菖蒲風呂  
 菖蒲風呂心身ともに穢れなく  
 先行きを考えてをり菖蒲風呂  
 泳がせる家見当たらず鯉幟  
 フリージア母の晩年孤独なる

濠前のホテルに春を惜しみけり

政子は自宅マンション室内の水漏れ事故による改装のためしばらく明石城公園前のホテルで過ごした。そのホテルから眺めては句をせっせと詠み掲出句もその中の一句。公園は彼女が毎月吟行を十五年近く重ねてきた場所でありなじみの光景。それを春の光景に慰められていたのだろうか。

逆境を糧に詩の世界で遊ぶのがいかにも俳人らしい。私もそのような境涯に遊ぶべしと眼から鱗が落ちた心境である。「葉桜」の空も印象的。淡々と身辺詠をつづけるこの人の俳句人生はすごい。袋角や薄暑の句など自在である。俳人に年齢は不要か。

封を解く手前に匂ふ新茶かな

新茶だから点前かと思っただが違う。新茶の入った袋・パックが茶筒の封を切る寸前ですでに新茶の芳しい香りがしたのだろう。さすがに新茶は違う、という感動が匂い立ったのだ。よい匂いを漂わせること。たいてい「匂い立つような美しさ」という比喩的表現に用いられる。すると新茶美人という言葉も通つていよう。新茶美人のたしなむ新茶は句のように生き返るような香り。茶葉は手で揉むと香りがよくなる。高級な茶葉は揉んで針のようになる。香りは勿論最高。「白つつじ」を舌先でほんのり甘く感じたという句は生理的に合っている。百科事典によると「甘味」は舌の先っぽで感じる、「塩味」は舌の両側の前のほうで感じる、「酸味」は舌の両側の後のほうで感じる、「苦味」は舌の奥のほうで感じる」と書いてあった。詩に化学的根拠など無粋だが、化学的生理学的に合っていればなおよい。この人だんだんと俳句に力が入ってきた。

母の日 ◎ 升田ヤス子

寄墓の空にて飛花の込み合へる  
菖蒲湯や刃文のやうな波立てて  
参道の柏餅屋は同級生  
母の日の服のサイズを訊かれけり  
菱の花沼昏ければ光りけり  
間違うて鳩の下りたる青みどろ  
首蓓や遺跡にひろぐ握り飯  
栗の花匂ふ遺跡の森深く  
鶴の絵の板戸しらじら灌仏会  
手のモデル乞はれて甘茶注ぎけり

聖五月抄

蓮花 ◎ 善野 行

蝶追うて疲れを知らぬ童かな  
しやぼん玉見つめては笑む赤子かな  
山法師野点日傘と向かひあふ  
風孕み節打ち合へる竹の秋  
中宙になほ空のぞみ花水木  
黄菖蒲の汀明かりとなりにけり  
鳶どもの慌て合うたる青嵐  
海山のあはひ果てなき五月来る  
鋤くによき色となりたる蓮花かな  
藪間にかく小さき池未草

母の日の服のサイズを訊かれけり  
ただ単にサイズを訊かれたのではなく、新しい服を  
プレゼントしようと服のサイズを素直に訊いたのだ  
と思う。日頃あまりお洒落、身だしなみに気を使わ  
ない母親に粋な服装をしてもらいたいのだ。若いこ  
ろは羽田空港で颯爽と働いていたころの母親に戻っ  
て欲しい気持ちも少し。  
若いころの母は娘たちの誇りと憧れの女性で映画や  
テレビドラマにもなった職場。「ええっサイズはい  
くらう？」と太った母に驚いてサイズを訊いたのではな  
い。只母の日に服のサイズを訊かれたというだけの  
句だが、俳句は出来るだけ省略して提示するほうが  
鑑賞の幅が広がる佳事例。甘茶の句もしかり、し  
みじみ俳句はモノを言えぬ、いやモノを言わない文  
芸なのだ…。だったら「鑑賞もそうだろう！」とお  
叱りをうけそつだ。

鋤くによき色となりたる蓮花かな  
紫雲英の花色をみてそろそろ鋤込む時期が来たと  
判断。行はこのような句で進んでいくのもいいかも。  
おそらく飯田蛇笏のような、目標におく俳人もある。  
昔仲間だった新潟の角川賞作家若井新一と比べられ  
るような作家になればいいと思うが本人次第。竹の  
秋も季節感が欲しい。花水木の句は主観が効いてい  
るかどうか。赤子の句。将来にお孫さんが喜んでく  
れるかどうか。傍に忌憚のない友人がいることも大  
切。孫俳句は早く卒業してほしい。せめて草田男の  
「万緑」のような文芸高い作品を。未草の作品「かく」  
は飾りすぎ。藪間という言葉も一般には通じにくい。

## 野点傘 ◎ 廣畑 育子

坪庭のふと白き風手鞠花  
 野点傘若葉の風を背なにかな  
 朝風に芍薬の花ほどけそむ  
 夏満月刻を同じくして仰ぐ  
 緑雨かななんじやもんじやの花乱る  
 重なりのはきと透けたる寺若葉  
 ぷつくりと死してをりたる蚯蚓かな  
 蛇苺このくれなゐを恋ひにけり  
 夏蝶のまどふや我も惑ひをり  
 さやさやと黄藤揺れゐる屋敷町

## つつじヶ丘抄

## ひなげしは青 ◎ 延川五十昭

小梅の実落ちて古墳の村広き  
 夏暖簾石臼挽きの手打ち蕎麦  
 万緑の五重の塔や狐狸ヶ池  
 かはうその毛並み光れる夏の池  
 母の日やステンドグラスの百合の花  
 早苗田の風に白鷺動かざり  
 銀輪の白き靴下麦の秋  
 ヒマラヤのひなげしは青雲の嶺  
 奥の院紅き欄干栗の花  
 紅白によりそうて咲く未草

野点傘若葉の風を背なにかな

人は背後が無防備。また背中では人の精神状態も表わす。特に男の背中はその時の心理が手に取るように写る。掲句は若葉青葉の中野点をする為か茶屋の野点傘に休憩をしている光景だろう。その傘の中毛氈床几に腰かけると若葉の風が心地よく吹いてくる。この場合は全て心を解放して若葉の中に精神を解き放つ。佳いひとときであろう。同じ床几に坐す人とも心打ち解けるすがすがしい一刻を得ているのを詠んだ。芍薬の句も風をテーマに詠んでいる。この句は芍薬の花が盛りを超えてやがて散るであろう気配を見せた。マキノ植物図鑑によると「シャクヤクもボタンも同じボタン科ボタン属の植物で、初夏に気品高く優雅な大輪の花を咲かせるが植物の性質上の分類では、シャクヤクは草本類、ボタンは木本類」と異なるグループに属という。わかりやすくいうと、シャクヤクは宿根草、ボタンは花木。

ヒマラヤのひなげしは青雲の嶺

作者本人は夫婦でヒマラヤチベットに行った、というのを聞いた。掲句「ひなげしは青」で切る。たとえば青いバラは世界中のバラ愛好家の中では夢であり、英語でブルーローズ(青いバラ)の花言葉は、「不可能」といった意味が。その色は薔薇に人工的には出せないと言われてきたが洋酒メーカーが発明して話題になった。掲句の幻のヒナゲシはヒマラヤが生み出した青色という不可思議な気分さえ思える。ヒマラヤで実物に出会う芥子は麻薬だから天国近くで、神がかった気分になったにちがいない。後日譚では実際は少し違うようだが、事実と文芸上の真は違つからこれで佳い。夢風撰。

「かわつそ」の句、子規は別号獺祭とも言って「病臥の枕元に資料を多く置いてカワウソのようだ」と言っている。四国では獺をゲドウと言って子どもが一人泳いでいたらゲドウに尻を抜かれると怖がった。小学生のころ近所の子どもが溺れて死にかけている子を見たが、その子の肛門が開いていたので本当だ!と信じてその夜は眠れなかった。

## 翻る ◎ 延川 笙子

麦秋の稲美に目眩ひしてをりぬ  
 うどん屋の外は黄金の麦の秋  
 春雷やこんな小川に棲む大魚  
 新緑の山ひとまはり膨らみぬ  
 田起しにつづける鷺の歩みかな  
 睡蓮の葉と花に水隠りけり  
 翻る洗濯物や梅雨晴間  
 平池や密と番ひの糸蜻蛉  
 山なりに白つめ草の花の波  
 睡蓮や亀の去りたる水の音

垂水抄

## 燕の子 ◎ 永田万年青

片付けのはかどらざれど新茶飲む  
 行きつけの女将淹れたる新茶かな  
 かきわけて入りて匂へる菖蒲の湯  
 親燕巢には止まらず餌を配る  
 巢の近くゆききしてゐる燕の子  
 子燕の消えてしまひし軒の下  
 目で追ふも消えては現るる初燕  
 夏に入る昨日と違ふ日を受けて  
 匂帳持つ池のほとりの新樹光  
 光陰や令和五度目の夏来たる

翻る洗濯物や梅雨晴間

梅雨の晴間の天気を実感的に観察している。梅雨の晴間には強く風が吹く。それを利用して主婦は洗濯にいそむ。洗濯ものは晴間の風に水分を奪われて行くのが目に見えるように心地よい。晴間の風は鬱々とした人の気分をも乾燥して蘇らせてくれる。新緑の山とは大きな景を雄大に詠んだ。山の木々が緑に一回り大きく膨らんだ、と捉えたのだ。それは心理的でもあるが実景でもある。「うどんを食べた」その食堂の前は黄金色をした麦畑。うどんが美味しはずだという感慨の挨拶。

「麦秋の稲美」は兵庫県稲美町で紀州の印南と同じ地名。古事記や万葉集にも出てくる地域。現在も麦畑が広がり印南からは御妃が二人も出ている。(景行天皇妃・オマーン王妃) 麦秋という気候にもたしかに句のようなどんよりとした麦の熟れた空気。だが私には好きな季節でもある。

親燕巢には止まらず餌を配る

餌を運んできた親燕は巢に留まることなくホバリングして子燕に餌を与えるとすぐに引き返し餌を探しに出かける。親は休む暇などないのだ。その姿は人間や動物全般にも通じる。今月の万年青俳句は主として燕に的をしぼって作句した。やがて時がくると来燕も巣立ち消えてしまったとやや寂しい様子を詠んでいる。必死に育てたのが本能なのか、親の情なのか、動物虫魚に通じる親子の情は不思議なものがあり、深い。万年青俳句がもう一步踏み込んで見ると平明で深い親の情を次にも詠めると信じている。



ばら色 ◎ 谷口 一献

ばら色の薔薇に見惚れてをりにけり  
吟行の一団の往く薔薇日和  
万緑の上を悠々逃げる鳶  
碗の底薄緑なる豆御飯  
茨焦げて蒸し焼きとなる蚕豆  
母の日はいつも豪華なプレゼント  
閉園の笑顔と涙五月尽  
雲もなく飛ぶ鳥もなき夏始  
潦小径に流れ梅雨に入る  
四阿のしじまを衝きて縞蜥蜴

箕面抄

母の日 ◎ 出口 誠

みどりの日みどりのペンで書いてをり  
久々のサンドイッチよ子どもの目  
丸パンのサンドイッチよ子どもの日  
子どもの日感じる愛の不器用さ  
夕食の激辛カレー子どもの日  
一口で汗を出させるカレーかな  
母の日や実家に「六花」持つて行き  
母の日にやはり言はれた「わからない」  
母の日やそれでも良しと思ひつつ  
初夏の夜の姉のメールに悔い残る

ばら色の薔薇に見惚れてをりにけり  
何気なくこの句をみていて「はて、ばら色とはどんな色？」と考えた。百科事典には「ばらいろ【薔薇色】色名の一つ。へしよつびいろ」ともいう。その色彩規格では「あざやかな赤」としている。一般に、バラ科バラ属植物の赤い花の色を表す。」とあった。ばらに何かの名詞が結ばれるとある比喩を表わすようになる。例えば「バラ色の人生」は、「自分一人で彼が私を抱きしめて私にそっとささやくとき人生がバラ色に見える」というような歌詞によって定着した話のエディットピアフとイブモンタンの恋は有名。

母の日や実家に「六花」持つて行き

誠君の実家は教育家の一家でお父上は校長、誠君の兄弟もみな教育者。すぐ近くの実家に「六花」を持参して褒められた自分の句を見せたのだろう。ここ数年彼には人にも言えないような苦難が襲った。それを俳句で乗り切ろうともがきあがいていたのだろう。しかし俳句は孤独を救うこともある。かれは俳句によって苦悩の自らを解放している。たかが俳句されど俳句。こういう生の姿をぶつけてくる俳句は大切。「初夏の夜」の句、初夏というのは何気なく使っているが、水原秋櫻子は「暑さもさまざまなくて、物憂い晩春に比べるとむしろ心地よい感じがする。これは日光のやや強くなることが原因なのであろう。(略)湖沼の光を見ても海の色を眺めても或いは吹く風の肌触りなどによっても、晩春と違ったものを感じ取ることができる」と解説している。ただ単にその時がたまたまそうであったという季語を安易に使いたくないとも思う。姉上のメールがどのようだったか知らないが、つい甘えたさっけない返事をしたのだろうか。誠君の俳句が有名進学塾の課題句に採り上げられている。

## 菖蒲の湯 ◎ 田尻 りさ

盆梅の梅一粒の愛さるる  
 みようがたけ仕方なく置く庭石に  
 下萌に優しくされる足の裏  
 茶の葉燃る八十八夜の筵かな  
 小路奥に子供のはしやぎ菖蒲の湯  
 春夕日海に落ち入り沸騰す  
 新緑に車消えゆく丘の道  
 夜桜の静まりの中賑やかに  
 街の背の神戸の山や新樹光  
 春雨におよよおよと足乱る

相生抄

## 母の日 ◎ 出口 誠

山吹や庄屋の奥の鎧櫃  
 藤の花歩く早さで行けばよい  
 まんさくや田舎は曲がる道ばかり  
 芝桜母をつれゆく乳母車  
 霞草ブーケに送る怖さあり  
 頂点を望むことなき葱坊主  
 菜の花や欠伸より寝に入りたる  
 四十六都道府県の藤の花  
 風通る青麦の中村の中  
 縁側に父の胡座や端午の日

みようがたけ仕方なく置く庭石に

茗荷竹は春の若芽のことで、山菜として人気が高い。掲句は友人か知人にお裾分けに持参したが、あいにくと留守だったのか、しかたなく縁側の庭石の上において帰った。こんなお土産を置いて行くのはタジツサだろうと相手は分かるから、後で礼の電話でもくるにちがいない。また同時作「下萌えに優しくされる」の作品も萌え出た草を踏んだ柔らかい感触が伝わってくるような作品。小路奥の句、狭い通路の奥の意味で、その奥の方から子どものはしゃぐ音がしてふる。お風呂屋さんで今日は端午の節句、菖蒲の湯に子どもたちがはしゃいでいる。菖蒲で邪気を払って子どもたちがすくすくと元気に育ってくればいいと、りさも願う。茗荷竹は子どもに通う。子どもは世の宝である。但し句は山本山であるからひと工夫ほしいところ。「盆梅の一粒」も佳い。歌人の青木朋子さんが7月号の句「色鯉の大口あけて天を喰ふ」を褒めている。

菜の花や欠伸より寝に入りたる

欠伸してすぐ横になって眠るのは老人にとつて羨ましいこと。幼いころはそのまま、眠りに入る。大人になり社会にでるとそうはいかない。眠気をかみ殺して仕事などに取り掛かるなど自由に眠るのは許されない時代を思い起こし、ぞっとすることもあるのではないか。菜の花の咲くころは春眠と重なり掲句の取り合わせは悪くない。夢風撰候補。

端午の日の句、父親が縁側で胡坐（あぐら）をかいている。あぐらというのは古代朝鮮で「あんこら」という。安座であんぐら。時代によっては女性も胡坐をかいていた。ふとそんなことをこの句から思考が飛んだ。そういう意味では面白い話題を提供してくれた句とも。「まんさくや」の句、花の形状がねじれているのでそれを幹旋したのであるう。日本で直線区間が一番長いのは、北海道の室蘭本線にある白老駅の東約2キロの地点から沼ノ端駅までの28.7キロの区間、私も車で夜間走ったが何だか怖かった。田舎の曲がりくねった道のほうが安心。